

番号	名 称	解 説	年 代
	I 形態と素材	このセクションでは、〈物〉としての和書を考えるという観点から、和書が何を素材にしてどのように作られているか、装訂・書型・各部位の名称・料紙、その他について解説します。	
	(1) 和書の装訂	装訂とは、簡単に言えば紙をどのように使って一つの本を作るかということで、形状から、大きく卷子本の類・折本の類・冊子本の類に分けることができます。	
	卷子本の類	紙を横に貼り継いで行き、丸く巻いた装訂で、卷子本と継紙がこれに当たります。	
	卷子本	紙を糊付けして繋げて行き、左端に付けた軸を中心に丸く巻いたもの。右端に表紙を付けて全体をくるむ。奈良時代以前からある装訂。版本にも見られるが、分野が限られる。	
I-1	室町殿月次和歌御会	永享四年二月十一日の室町殿月次御会の和歌。軸末に、飯尾常房（1422～85）の筆跡と極めた鳥養宗晰の識語がある。 （軸末識語）右哥飯尾彦六左衛門尉筆跡／分明也依御所望加奥書畢／為恐々々／天正十三年端月下旬／沙弥宗晰（花押）	室町中期写
	継紙	卷子本に似るが、軸と表紙のないもの。未装卷子本と言うこともある。なお、短いものでは巻いていない場合もあるが、それも含める。	
I-2	智袋		長禄4年(1460)写
	折本の類	紙を横に繋げて折り畳んだ装訂で、折本・折帖などがこれに当たります。	
	折本	紙を横に繋げ、等間隔で山折りと谷折りを交互に作って折り畳んだ装訂。折帖と異なり、折の半分がそれぞれ一枚の紙で作られていることはなく、また紙の継ぎ目と折り目も通常は別である。	
I-3	隆達小歌集		江戸初期写
	折帖	厚手の紙を、別の薄手の紙などを用いて横に繋げ、継ぎ目が交互に山と谷になるように折り畳んだもの。	
I-4	扇面奈良絵帖	『扇の草子』の一本。絵のみで和歌はない。	江戸前期写
	冊子本の類	紙を複数枚重ね、一方の端を綴じるか糊付けした装訂で、紙の使い方などによりいくつかの種類に分けられます。	
	粘葉装	紙を二つに折り、外側の折り目の脇を糊代として貼り重ねたもの。平安時代からある装訂。版本の例は、ほぼ仏書に限られる。	
I-6	金剛界発恵鈔		鎌倉末期写
	列帖装	紙を二枚以上重ねて二つ折りにしたもの（一括り・一折）を複数並べ、糸などで綴じたもの。平安時代からある装訂。主に写本に見られ、版本にもあるが、分野が限られる。	
I-7	五相成身事		室町後期写
	折紙列帖装	列帖装の一種で、料紙に折紙を用いたもの。（折紙については折紙綴を参照。なお折紙列帖装では、縦長の紙を二つ折りにするものもある）	

番号	名 称	解 説	年 代
I-8	連歌至宝抄		慶長12年(1607)写
	袋綴	紙を二つ折りにして重ね、折り目と反対側の端を糸や紙縫などで綴じたもの。平安時代からある装訂。	
I-9	唯増闕減事		正中2年(1325)写
	折紙綴 (仮称)	折紙 (横長の紙を折り目が下になるように二つ折りにしたもの、またはその半截が主) を重ね、右端を糸などで綴じたもの。版本の例は少ない。	
I-10	傾城禁短気	江島其磧作、八文字屋八左衛門刊の浮世草子。	宝永8年(1711)刊
	単葉装	折っていない紙を重ね、右端を糸や紙縫などで綴じたもの。	
I-11	仮名文字遣		明応4年 (1495) 写
	双葉装 (仮称)	紙を二つ折りにしたものを重ね、折り目に近い端を糸や紙縫などで綴じたもの。粘葉装と同じ紙の使い方であるが、糊付けでなく糸などで綴じる点異なる。	
I-12	西行上人発心記	『西行物語』の一写本。	江戸前期写
	折紙双葉装 (仮称)	双葉装の一種で、料紙に折紙を用いたもの。横長の本に限られるか。版本の例も稀にある。	
I-13	伊勢御室流諸印信	「法曼院」 (比叡山法曼院) の印記があり、天台宗系統の写本。	江戸中期写
	画帖装	二つ折りにした紙を、外側の折り目と反対側の端を糊代として貼り繋いだもの。一枚で完結する絵を集めて冊子本にする場合などに用いられる。版本の例が多く、江戸中期以降に考案された装訂か。	
I-14	端月集		慶応3年(1867)刊
	〔冊子本の綴じ方〕	冊子本を糸や紙縫などで綴じる場合、その通し方いくつかの種類があります。紙の使い方と綴じ方の組み合わせによって、各種の冊子本が作られます。	
	結び綴	冊子本の右端に上下各二箇所ずつ穴を開け、それぞれに紙縫や紐などを通し、結んで綴じたもの。	
I-15	扇合		江戸末期写
	四つ目綴	冊子本の右端に四箇所穴を開け、糸を通して綴じたもの。袋綴本によく用いられるが、単葉装・折紙綴などにも見られる。	
I-16	都名所図会	I-17の安永9年刊本に次ぐ再版本。	天明6年(1786)刊
	五つ目綴	冊子本の右端に五箇所穴を開け、糸を通して綴じたもの。四つ目綴より一手間多くかかり、概して上製本と考えられる。	
I-17	都名所図会	初版本。	安永9年(1780)刊

番号	名 称	解 説	年 代
	康熙綴	四つ目綴の上下の穴と角の間に穴を開けて糸を通したもの。中国・清の康熙年間（1662-1722）に流行した綴じ方を取り入れたもので、江戸中期以降に用いられた。	
I-18	蘭桂集		文久2年(1862)刊
	紙釘装	冊子本の右端に数箇所穴を開けてそれぞれに紙縷を通し、表紙から少し出るようにして切り、出た部分を叩いてつぶし、抜けないようにして綴じたもの。つぶした紙縷の端が釘の頭の形であることから紙釘装と言う。	
I-19	褒貶哥合	装訂は袋綴。	江戸前期写
	背穴綴（仮称）	背の部分の紙の折り目に穴を開け、糸などを通して綴じたもの。列帖装と単帖装に用いられ、普通は上下に二箇所ずつの穴を開け、二箇所の穴の間にそれぞれ糸を通して行く。双葉装の例も稀にある。	
I-20	源氏物語 総角		江戸中期写
	〔冊子本の表紙の付け方〕	冊子本の表紙は、通常表紙と裏表紙に分かれています。表から裏にかけて一枚の表紙をかけることがあります。	
	包背装	冊子本の表紙を前後別々に付けず、一枚の表紙で背をまたいで全体をくるむようにしたものの。	
I-21	墨田河扇あはせ		江戸末期写
	(2) 和書の大きさ (書型)	和書のうち冊子本には、一定の規格による大きさで作られているものがあります。ここでは、写本・版本それぞれの規格型の例と、規格外の例について説明します。	
	規格型 -写本-	冊子本の写本は、必ずしも規格に沿って作られていないことも多いのですが、次の四半本や六半本は、規格型の例にあげることができます。	
	四半本	全紙を長い方の辺で二等分し、その一枚を二つ折りにしたものを組み合わせて冊子本としたもの。全紙の四分の一の大きさなので、四半本（四つ半本）と言う。	
I-22	伊勢物語		江戸前期写
	六半本（柘形本）	全紙を長い方の辺で三等分し、その一枚を二つ折りにしたものを組み合わせて冊子本としたもの。全紙の六分の一の大きさなので、六半本（六つ半本）と言う。また、形がほぼ正方形であることから柘形本とも呼ぶ。	
I-23	百人一首		江戸中期写
	規格型 -大本系の版本-	冊子本の版本において、美濃紙の全紙を基本にしたものを大本系と呼びます。	
	大本	美濃紙の全紙を長い方の辺で二等分し、その一枚を二つ折りにしたものを組み合わせて冊子本としたもの。	
I-24	江家次第		江戸前期刊
	中本	大本を長辺で二等分した大きさの、縦長の本。	

番号	名 称	解 説	年 代
I-25	頭書 徒然草		江戸前期刊
	横中本	大本を長辺で二等分した大きさの、横長の本。	
I-26	義経記		正徳4年(1714)刊
	美濃三つ切本	大本を長辺で三等分した大きさの、横長の本。	
I-27	古今和歌集		文政6年(1823)刊
	規格型 -半紙本系の版本-	冊子本の版本において、半紙の全紙を基本にしたものを半紙本系と呼びます。	
	半紙本	半紙の全紙を長い方の辺で二等分し、その一枚を二つ折りにしたものを組み合わせて冊子本としたもの。	
I-28	絵本玉かづら		享保21年(1736)刊
	小本	半紙本を長辺で二等分した大きさの、縦長の本。	
I-29	源氏物語		江戸前期刊
	横小本	半紙本を長辺で二等分した大きさの、横長の本。	
I-30	狂言記		元禄12年(1699)刊
	半紙三つ切本	半紙本を長辺で三等分した大きさの、横長の本。	
I-31	諸国 道中旅日記		安政3年(1856)刊
	規格外	冊子本の写本・版本とも、規格に当てはまらない大きさの本がしばしばありますが、そのうち特徴的なものを示します。	
	縦長本	大本や半紙本に比べ、縦の比率が大きい冊子本。漢籍の和刻本や、中国の本(唐本)を真似た本などに見られるが、和文の本に用いられた例もある。	
I-32	字集便覧		承応2年(1653)刊
	特大本	大本より大きいサイズの本。	
I-33	集古十種		江戸後期刊
	特小本	小本より小さいサイズの本。豆本・袖珍本などとも言う。	
I-34	後撰和歌集		寛政10年(1798)刊

番号	名 称	解 説	年 代
	(3) 和書の各部位	〈物〉としての和書は、様々な部位から成り立っています。ここでは、和書を物理的に構成する各部位の名称・性質・機能などについて解説します。	
	表紙	和書において、本体部分の外側にあつてそれを覆う部分が表紙です。表紙は目につきやすいため、装飾に意が用いられることも少なくありません。	
	金欄表紙	表面に金欄を張った表紙。高級な装本であり、版本には特別な場合以外用いられない。	
I-35	枕草子		江戸前期写
	紺地金泥表紙	紺色の紙に金泥で絵や文様を描いた表紙。版本には通常用いられない。	
I-36	葛城	元和6年卯月（4月）の観世左近大夫暮閑の奥書を持つ100冊一揃いの観世流謡本で、元和卯月本と通称される。版本であるが、紺表紙に手書きの金泥絵のある豪華本。表紙の絵は一般的な草花の類を描くものと曲の内容にちなんだものがあり、展示資料は後者の例。	元和6年(1620)刊
	丹表紙	丹色（明るい朱）の表紙のことであるが、特に江戸初期に例の多い光沢のある丹色の表紙を指す。	
I-37	新撰朗詠集		寛永8年(1631)刊
	栗皮色表紙	柿渋を塗り重ねて、栗の皮のような色にした紙を用いた表紙。江戸初期から前期にかけて、仏書や漢籍などに多く用いられた。	
I-38	臨濟語録抄		寛永9年(1632)刊
	渋引き表紙	刷毛で柿渋を引いた紙を用いた表紙。栗皮色表紙のように塗り重ねず、比較的淡い色。表紙の全面に塗ったり、単純な文様を描くこともある。主に写本に用いられた。	
I-39	四季草		安政3年(1856)刊
	刷り付け表紙	合巻の表紙に錦絵を刷り出したもの。上下二冊、または上中下三冊を並べると一枚の図柄になるようにされている。	
I-41	北雪美談 時代加々見		文久3年(1863)～慶応4年(1868)刊
	共紙表紙	表紙のための特別な紙を使わず、本文料紙と同じ紙を用いた表紙。	
I-42	龍城院書籍目録		享保13年(1728)写
	艶出し文様	藍・朱・黒などに染めた紙を張った表紙を文様を彫った木型の上に置き、表面から文様の凸部分をこすって艶を出したものの。	
I-43	史記評林		寛永13年(1636)刊
	空押し文様	藍・朱・黒などに染めた紙を張った表紙に裏から文様を彫った木型を押し付け、文様を浮き出させたものの。	

番号	名称	解説	年代
I-44	水雄岡志		弘化4年(1847)刊
	見返し	表紙の裏側のことで、表紙の裏側を前見返し、裏表紙の裏側を後見返しと言います。写本では、ここに装飾が施される場合もあります。	
	扉	冊子本で、本体部分の初めに独立に一丁を取り、書名を記したものが扉です。書名以外の記載を伴うこともあります。	
I-45	前売買定法		江戸末期刊
	遊紙	冊子本の前や後に、何も記載しない白紙の丁を一〜二丁程度添えたものを遊紙と言います。ただし列帖装の本の後ろの遊紙は、しばしば数丁以上になることがあります。	
I-46	遠忠自歌合 百五十番		江戸前期写
	軸付紙	卷子本において、本紙の端に十分な余白がない場合など、軸を付けるための紙を貼り継ぐことがあり、軸付紙と言います。	
I-47	内裏名所百首		江戸中期写
	版心	冊子本の版本において、一丁分の版の中央部分のことで、両側に縦線が引かれていることが多いので、その形状から柱とも呼ばれます。袋綴本では、版心が丁の折り目になります。	
	咽	冊子本を見開きにした時の、中央線の両側の余白部分のことです。	
I-48	再撰 花洛名勝図会 東山之部	版心には何も記載がなく、丁裏の咽部下方に、「東山二ノ五十七」のように書名の略称と冊次・丁付が記される。なお本書は目録題と尾題が「東山名勝図会」で、咽の書名はそれに基づく。	文久2年(1862)刊
	小口	冊子本で、上・下・手前の紙の重ね目のことです。特に下小口を指すこともあります。	
	背	冊子本で、手前と反対側の部分です。画帖装以外は、背かそれに近い所で綴じられています。	
	角包み	主に袋綴の冊子本で、表紙を付ける前に綴じ代部分の上下の角を包むように貼られた、小さい布片のことです。江戸後期頃以降に見られます。	
I-49	群書類従		江戸末期刊
	(4) 料紙および 附属事項	和書の本体部分は、通常は紙で作られています。ここでは和書に用いられるさまざまな紙と、料紙に附属する事項について解説します。	
	料紙	和書のうち、表紙以外の本体部分に使われている紙を料紙(本文料紙)と呼びます。ここでは、和書の料紙の代表的なものを例示します。	
	鳥の子紙 (厚様斐紙)	雁皮の樹皮を材料とする斐紙のうち、厚く漉いたもの。鶏の卵のような色であることから鳥の子紙と言う。楮紙に比べて表面がなめらかである。	

番号	名 称	解 説	年 代
I-50	ねんぶつ		江戸前期写
	薄様斐紙	雁皮の樹皮を材料とする斐紙のうち、薄く漉いたもの。鳥の子紙と同じくなめらかであり、透明感がある。	
I-51	東関紀行		江戸初期写
	楮紙	楮の樹皮を材料として作られた紙。和書の料紙として最も広く用いられる。産地により、美濃紙・杉原紙などと呼ばれることがある。	
I-52	職原鈔	上下左右と行間に、墨界がある。	慶長5年(1600)写
	楮打紙	楮紙の表面を木槌などで叩き、斐紙のような光沢と手触りを出したもの。	
I-53	大宋高僧伝	上下左右と行間に、篋で押して線を引いた押界（白界）がある。	平安末期写
	斐楮交ぜ漉き紙	雁皮と楮を交ぜて漉いた紙。交ぜる比率の違いにより、手触りなどが異なる。	
I-54	堀河院百首和歌注		室町末期写
	間合紙	長さを襖障子の幅（約一メートル）に合わせて漉いた紙が間合紙であるが、斐紙に泥土を交ぜて漉いた泥間合紙が書物にも用いられた。	
I-55	荒木田麗女句文		天明8年(1788)写
	三桮紙	三桮の樹皮を材料にして漉いた紙。江戸中期以降に書物に用いられるようになり、斐紙の代用ともされた。	
I-56	袖珍歌枕		宝永5年(1708)刊
	宿紙（漉き返し紙）	反古紙を漉き返して作った紙。墨の成分によって薄墨色を呈する。ただし本来の宿紙のほか、墨を交ぜて漉き、宿紙に似せた紙もある。	
I-57	天道大福帳		天明6年(1786)刊
	丁付	冊子本において、その丁が何丁目に当たるかを記した数字が丁付です。	
	界・罫	写本において、上下や行間を揃えて書くために引かれた線が界（罫）です。版本にも、界を持つものがあります。	
	匡郭	版本において、本文の周囲に引かれた枠線を匡郭と言います。線の種類により、単辺・双辺・子持ち枠など呼びます。	
	紙背文書	卷子本・折本や紙を二つ折りにして使う冊子本で、既に何か書かれていた紙を裏返して用いることがあり、その場合の元の文書を紙背文書と呼びます。	
I-58	月日の本地	室町物語『月日の本地』の袋綴本を裏返して、浄土真宗系の仏書や『太平記』等の抜書を書写してあったもの。現在は『月日の本地』を表にして綴じてある。	江戸初期写

番号	名 称	解 説	年 代
	(5) 附属品	和書は、それを保護するための袋や帙、箱などに納められることがあります。ここでは、それらの和書に附属する物品について解説します。	
	包み紙	一点の本を包むほか、関連のある複数の本を一枚の紙で包んでまとめておくこともあります。この場合は、保護とともに整理機能も持っていると言えます。	
I -59	生身不動法		江戸末期
	袋	本を入れる筒状の紙。特に江戸中期以降の版本で、表面に書名・著者名・版元名などを刷った袋に入れて販売することがありました。	
I -60	雑談集		江戸末期刊
	帙	本を厚紙等にくるんで保護するものです。江戸時代までは、主に紙帙が用いられました。現在では布張りの帙が一般的です。	
I -61	新局玉石童子訓		弘化2年(1845)刊
	箱	桐や杉などの木箱が一般的で、漆を塗った塗り箱も多く用いられます。関連する複数の本を一つの箱に納めておく場合は、保護とともに整理機能も持っています。	
I -62	夫木和歌抄		江戸後期
	(6) 版本	版本のうち整版本は、板に文字や絵などを彫った版木を用いて印刷されます。ここでは伝存する版木を、それによって印刷した本とともに展示します。	
I -63	毛詩品物図攷 版木と版本		版本は天明5年(1785)刊

番号	名称	解説	年代
	Ⅱ 構成要素	このセクションでは、和書がどのような内容から成り立っているかという観点から、和書を内容的に構成するさまざまな要素について解説します。	
	(1) 和書の内容構成 表紙記載・見返し記載・扉 記載・序・目録・本文・ 跋・奥書・刊記・広告 書き入れ・付箋・貼り紙・ 識語・所蔵署名・蔵書印・ 整理記号・整理番号	※展示パネル参照	
	(2) 書名 (題記)	和書の多くには、書名 (題記) が記載されています。それらは表紙にあるもの (外題) と、本の内部にあるもの (内題) に大別され、内題はその位置によってさらに区別されます。	
	外題	表紙にある書名を外題と言います。これに対し、本の内部にある書名が内題です。外題は、題簽を用いる場合と、表紙に直接記載する場合があります。	
	打付書き外題	表紙に直接書かれた外題を、打付書き外題と言う。和書では古くは題簽を使わず、表紙に打付書きされていた。一般に題簽を用いるようになったのは、室町時代頃以降と見られる。	
Ⅱ-1	源氏物語		鎌倉時代写
	書き題簽	外題や巻冊の順を記載するため、表紙に貼る細長い紙片や布片が題簽で、そのうち、文字が筆で書かれたものを書き題簽と言う。写本は普通書き題簽である。	
Ⅱ-2	源氏物語		江戸初期写
	刷り題簽	題簽のうち、文字が印刷されたものを刷り題簽と言う。主として版本に用いられるが、稀に書肆によって製作された写本に使われることもある。	
Ⅱ-3	無量寿経鈔	撰者の了慧道光 (1243~1330) の号が望西楼で、外題の「望西楼」はそれによる。	慶長20年(1615)刊
	絵題簽	題簽のうち、書名のほかにその本の内容に関わる絵が描かれたものを絵題簽と言う。江戸中期以降、草双紙類に多用された。	
Ⅱ-4	新版 落噺 京鹿子		江戸後期刊
	刷り外題	表紙に直接印刷された外題を、刷り外題と言う。文字だけのものと、題簽の形に枠で囲んだものがある。丁数の少ない、簡素な本によく用いられた。	
Ⅱ-5	狂歌列仙画像集続編		江戸末期刊
	見返し題	内題の一種で、前見返しにあるものです。写本や江戸時代以前の古版本には普通ありません。	
Ⅱ-6	清俗紀聞		寛政11年(1799)刊
	扉題	内題の一種で、扉にあるものです。	
Ⅱ-7	鷺流狂言記		江戸後期写

番号	名称	解説	年代
	序題	内題の一種で、序の冒頭にあるものです。「(書名)序」という形になっているのが一般的です。	
Ⅱ-8	江戸年中行事		嘉永4年(1851)刊
	目録題	内題の一種で、目録の冒頭にあるものです。「(書名)目録」という形になっているのが一般的です。	
Ⅱ-9	内裏雑	本書は、目録題「山城名所寺社物語」、巻首題・尾題「内裏雑」、版心書名「京の花」で、享保2年刊本の一冊の外題には「〈山城／名所〉たいりひい(?)□」とある。一つの本で二種類の書名を持つものはしばしばあるが、全く異なる三種類の書名があるものは珍しい。	宝暦7年(1757)刊
	巻首題	内題の一種で、本文の冒頭にあるものです。狭義では、この巻首題を内題と呼ぶことも多くあります。	
Ⅱ-10	内裏雑		享保2年(1717)刊
	柱題(版心書名)	冊子本の版本の版心部分(柱)にあるもので、しばしば柱題と呼ばれますが、正式な題記ではなく書名の略称の場合も多いので、版心書名と呼ぶのが穏当です。	
Ⅱ-11	内裏雑		享保2年(1717)刊
	尾題	内題の一種で、本文の末尾にあるものです。「(書名)終」という形になっていることがしばしばあります。	
Ⅱ-12	内裏雑		宝暦7年(1757)刊
	跋題	内題の一種で、跋の冒頭にあるものです。「(書名)跋」という形になっているのが一般的です。	
Ⅱ-13	本朝画史		元禄6年(1693)刊
	小口書	下小口に書かれた記事です。所蔵者が整理保管の便宜上、書名や巻次などを記入したものが大半ですが、それ以外の情報が書かれることもあります。	
Ⅱ-14	吉水法語集	小口に書名はなく、「宝順求」という入手識語が記されている。	江戸末期刊
	(3) 序・跋	和書には、しばしば序や跋があります。著編者自身によるものと他人によるものがあり、著作の成立などについて重要な情報を提供することが稀ではありません。	
	序	前書きに当たります。著者自身や著者と縁のある人によって書かれることが多いですが、名家が依頼されて執筆したり、古い著作を刊行する際などに、後人によって書かれる場合もあります。	
Ⅱ-15	撰津名所図会	序者は中山愛親で、その自筆を刻したものです。	寛政8年(1796)刊
	跋	後書きに当たります。序と同様、著編者自身や縁のある人、後人などによって書かれます。「後序」と題することもあります。	
Ⅱ-16	類柑子	跋者は、著者の其角と親交のあった水間沾徳で、その自筆を刻したものです。	享保4年(1719)刊

番号	名称	解説	年代
	(4) 本文	和書の内容のうち、最も重要なものが本文です。本文以外の要素はなくても書物として成り立ちますが、本文を欠く書物はありません。	
	本文	著作の中心部分です。文字のほか、絵を含むこともあり、時には絵図だけから成ることもあります。注釈に対する本文という、狭義の用法とは異なります。	
Ⅱ-17	平家物語(長門本)		安永3年(1774)写
	目録	その著作の章節名や項目名等を列記したものです。複数の巻から成る著作では、巻ごとに記載する場合と、初めに全巻の分をまとめて載せる場合があります。	
Ⅱ-18	平家物語(長門本)		安永3年(1774)写
	著作注記	主に巻首題の下や脇にある、著者名や著作の成立に関する記事です。著者自身の記したものと、後人の記したものの両方を含みます。	
Ⅱ-19	雑談集		延宝7年(1679)刊
	(5) 奥書と識語	写本において、末尾に書写の年月日や書写者の名などを記したものが奥書で、写本に特有のものです。識語は、所蔵者などがその本や著作について書き入れた言葉で、写本にも版本にもあります。	
	奥書	写本を書写した人が、年月日や名前、書写の事情などを末尾に記したものです。本奥書と書写奥書の別があります(Ⅳの(2)を参照してください)。	
Ⅱ-20	仙洞御着到百首	宝永3年の奥書は伊達吉村(仙台藩主、1680~1752)のもの。	宝永3年(1706)写
	識語	本の所蔵者などが、その本や著作について書き入れた言葉です。奥書と同様本の末尾に書かれるほか、冒頭部や途中の余白に書かれることもあります。	
Ⅱ-21	栄花物語		江戸初期刊
	(6) 刊記と広告	版本において、刊行の年月日や版元名などを記載したものが刊記です。末尾のほか、前見返しなどにあることもあります。広告は、版元による出版物の宣伝です。	
	本体部分末尾の刊記	刊記のうち、本体部分の末尾に記載されているものです。冊子本では、最後の丁に余白があればそこに記載されるのが一般的です。	
Ⅱ-22	四書大全		寛永9年(1632)刊
	後見返しの刊記	冊子本で、後見返しを使って刊記を記載しているものです。この形の刊記を、特に奥付と言うこともあります。	
Ⅱ-23	俳家奇人談	4店の書肆名が並ぶ連名刊記で、その下に横書きで「各同志開版」とある。	文化13年(1816)刊
	前見返しの刊記	冊子本の前見返しに記載されている刊記です。刊行の事情などを記した文章はなく、版元名(年月)だけの簡潔な形が普通です。	
Ⅱ-24	仏鬼軍	この本にはほかに刊記はなく、前見返しの刊記が唯一のもの。	江戸末期刊
	蔵版記・蔵版印	広義の刊記の一種ですが、蔵版者(出版権を持つ者)を記したものです。蔵版者は、藩や寺社・家塾などが多く見られます。印記になっているものは、蔵版印と言います。	

番号	名称	解説	年代
Ⅱ-25	中山伝信録		明和3年(1766)刊
	広告	版元による、既刊や近刊の出版物の宣伝です。通常は冊の末尾にあり、刊記に並んでいるもの、独立の丁になっているもの、見返しに貼り込まれているものなどがあります。	
Ⅱ-26	絵本保元平治物語	最終丁に江戸の書肆鶴屋喜右衛門の刊記と広告があるが、後見返しに大坂の書肆塩屋長兵衛の『日本山海名産図会』の広告が貼り込まれている。塩屋長兵衛は、販売者または求版者と見られる。	安永10年(1781)刊
	(7) 書き入れ・付箋・貼り紙	読者が、注記や覚書などを本に直接書き込んだり、別紙に書いて貼り付けることがあり、前者を書き入れ、後者を付箋または貼り紙と言います。	
	書き入れ	漢文に訓点を付けたり、行間や欄外などに注釈・補記・覚書などを書き込んだものです。当該の本に固有のもののほか、親本や別の本から書き写すこともあります。なお卷子本や折本の紙背に書かれたものは、特に裏書と言います。	
Ⅱ-27	萬葉集	(第一冊表紙貼紙) 此巻書入紫墨 師鶴屋秋成大人説／朱墨 円珠菴契沖密師説 万葉代匠記三十卷有／緑墨 拾穂軒季吟説 万葉拾穂抄三十卷有／藍墨 荒木田久老神主講説	寛永20年(1643)刊
	裏書	卷子本・折本などにおいて、裏面(紙背)に記入された注釈や補記の類。原則として、対象となる言葉や記事の裏の位置に書かれる。	
Ⅱ-28	覚禅鈔 六字明王経法		延慶3年(1310)写
	付箋・貼り紙	内容は書き入れや裏書と同様ですが、直接本に書くのではなく、別の紙片に書いて貼り付けるものです。	
Ⅱ-29	野槌		江戸初期刊
	(8) 所蔵者情報	和書には、所蔵者が印を捺したり、署名を記すことがしばしばあります。これらは、その本がどこで写されたか、またどのように伝わって来たかを知るための重要な手掛かりとなります。	
	所蔵署名	所蔵者が、その所蔵であることを示すために本に記した署名です。	
Ⅱ-30	慶長九年十二月兼如独吟千句		江戸前期写
	蔵書印	所蔵者が、その所蔵であることを示すために本に捺した印です。同じ所蔵者が複数の蔵書印を使用することも珍しくありません。	
Ⅱ-31	延文百首	冊初の「八雲軒」、冊末の「藤亭」「安元」は、好学の大名脇坂安元(1584～1653)の蔵書印。	江戸初期写

番号	名称	解説	年代
	Ⅲ さまざまな本	このセクションでは、千三百年以上の歴史を持つ和書の中から、各時代の写本や版本、特色のある本を選んで紹介し、あわせて書物の周辺に位置する資料も展示します。	
	(1-1) 各時代の写本	日本の写本の歴史は七世紀に始まり、現在に及んでいます。ここでは、その時代の変遷を見ていただくために、各時代の写本の例を選んで展示します。	
	奈良時代の写本	奈良時代の写本で現存するものはほとんどすべて仏書で、その大半が写経です。これらは、現在の所蔵に関わりなく、本来は奈良の諸寺院に伝来したものが主体です。	
Ⅲ-1	大般若波羅蜜多經 断簡(永恩具經)		奈良時代写
	平安時代の写本	現存する平安時代の写本には、仏書以外の国書や漢籍も少なくありませんが、量的にはやはり仏書が主体です。ただし写経の割合は減少し、日本で作られた教理や修法に関する書が増えてきます。	
Ⅲ-2	金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修	全体に朱のヲコト点を付す。ヲコト点は真言宗小野流で用いられた東大寺点。	平安末期写
	鎌倉～南北朝時代の写本	鎌倉～南北朝時代は現存する写本の数も増え、ジャンルも広がってきます。また、著者の自筆本や成立年時に近い写本が残ることも持筆されます。	
Ⅲ-3	閑居友 残簡		鎌倉初期写
	室町時代の写本	室町時代の写本は、現存数が格段に増加し、著者自筆本の伝わるものも稀ではありません。	
Ⅲ-4	詞花和歌集		応仁3年(1469)写
	江戸時代の写本	出版が盛んになった江戸時代にも、依然として多量の写本が作られました。時代が近いだけに、現存する量も膨大です。	
Ⅲ-5	うつほ物語 俊蔭		江戸中期写
	明治時代の写本	明治時代には、和紙に墨で書く写本が普通に作られていました。しかし大局的には、伝統的な写本が書物の世界で重要な役目を終えつつあったと言えます。	
Ⅲ-6	慕景集 附作者考		明治28年(1895)写
	(1-2) 各時代の版本	日本の版本は、平安時代後半以降その事例が増えますが、遺品が多く残るのは鎌倉時代からです。ここでは、鎌倉時代以降各時代の版本の例を展示します。	
	古版本	室町時代以前の版本を、古版本と呼びます。古版本の多くは寺院で出版されたもので、寺院や宗派による名称が付けられています。	
	春日版	平安末期頃から奈良の興福寺で出版された本で、しばしば刊記に法相宗の守護神である春日の神への信仰が表明されていることから、春日版と通称される。法相宗関係の経論やその注釈書が主体。	
Ⅲ-7	成唯識論		鎌倉初期刊
	高野版	鎌倉中期から高野山で出版された本で、弘法大師の著作を初め、真言宗関係の経典や教理書が中心。冊子本は粘葉装に装訂され、高野紙という厚手の楮紙を用いるのが特色。	
Ⅲ-8	大毘盧遮那成仏神変加持經		正嘉3年(1259)刊

番号	名称	解説	年代
	五山版	鎌倉中期から、京都と鎌倉の五山を初めとする禅宗寺院で出版された本で、仏書のほか漢籍なども少なくないことと、中国や朝鮮の版本の強い影響が見られることが特色。	
III-9	東福開山聖一国師年譜	版木の片面に二丁分の版が彫られているため、次丁右端または前丁左端が刷られたのが咽の部分に見える。	応永24年(1417)刊
	古活字本	十六世紀の終わりから十七世紀の半ばにかけて、主に木製の活字を用いて印刷した本が多数作られました。これを古活字本と言い、出版地などによる特定の名称を持つものがあります。	
	勅版	天皇が命じて出版させた本。後陽成天皇による文禄勅版(文禄2年〔1593〕刊『古文孝経』、現存せず)と慶長勅版(慶長2年〔1597〕～8年刊『日本書紀神代卷』『論語』など)、後水尾天皇による元和勅版(元和7年〔1621〕刊『皇朝類苑』)がある。	
III-10	皇朝類苑		元和7年(1621)刊
	嵯峨本	本阿弥光悦の創始した光悦流の書体を持つ一群の版本(大半は古活字本)は、嵯峨の角倉素庵の資金援助で出版されたと言われることから、嵯峨本と通称されている。ただし光悦と素庵の関与については明証がなく、想像にとどまる。	
III-11	盛久	嵯峨本の一つの光悦謄本のうち、色替わり料紙を用いた色替わり本と呼ばれるもの。	江戸初期刊
	伏見版	徳川家康が慶長4年(1599)から十一年にかけ、主に伏見の円光寺で活字により出版させた本。『貞観政要』『吾妻鏡』『周易』『七書』などが知られる。	
	叡山版	比叡山で出版された本。鎌倉時代にもあるが、一般には慶長～寛永期に出版された古活字本を指す。天台宗関係の仏書が中心。	
III-13	往生要集抄		寛永3年(1626)刊
	慶長元和期の古活字本	古活字印刷が隆盛を迎えた慶長～元和期の古活字本で、後の寛永期のものより概して書型が大きく、文字也大ぶりである。	
III-14	無言抄		江戸初期刊
	寛永期の古活字本	古活字印刷が隆盛から次第に衰退に向かった寛永期の古活字本で、概して文字が小ぶりである。	
III-15	うつほ物語		江戸初期刊
	江戸時代の整版本	古活字本の隆盛が終わった十七世紀半ば以降、再び整版本が主流になりました。古活字本では困難な、絵と文字が入り組んだり、和歌を散らし書きした版面は、整版本ならではのものです。	
III-16	歌仙金玉抄		天和3年(1683)刊
	近世～近代の木活字本	江戸時代後期から明治時代にかけて、木製の活字で印刷した本が作られました。これを近世(近代)木活字本と言います。	
III-17	萬葉集玉乃小琴		天保9年(1838)刊
	近代の整版本	明治時代になっても、江戸時代と同じ方法で整版本が作られています。しかし木版印刷による新刊本は、大正頃にはほぼ消滅したようです。	

番号	名称	解説	年代
III-18	博物新編		明治7年(1874)刊
	近代の和装 金属活字本	明治時代には、金属活字版という新しい方法で印刷し、伝統的な袋綴の和装本に仕立てた本も多数作られました。	
III-19	飛驒匠物語		明治17年(1884)刊
	(2-1) 絵入り写本	写本の中には、美しく彩色された多数の絵を持つものがあります。本文とともに、絵を鑑賞することを目的に作られているでしょう。ここでは、卷子本と冊子本それぞれの例を展示します。	
	絵巻	物語や説話等を題材に、詞書と絵を交互に貼り継いで卷子本とした絵巻が、平安時代以降多数製作されました。詞書がなく絵のみのものもあり、いずれにしても絵を重視した本と言えます。	
	奈良絵巻	江戸初期から前期にかけて製作された絵巻のうち、横型奈良絵本のような画風の絵を持ったもの。多くは物語を題材とする。	
III-20	伴大納言絵詞		江戸末期写
	絵入り冊子写本	絵巻より年代は遅れますが、絵を多く含む冊子の写本も作られました。その代表的なものが奈良絵本です。	
	奈良絵本	室町末期から江戸前期にかけて多数製作された、主に物語を題材とした冊子体の絵本。列帖装の縦型本と袋綴の横型本があり、前者の絵は精緻な描法と鮮やかな色違いを持ったものが多く、後者の絵は素朴で親しみやすいものが多い。	
III-22	御所まと		江戸前期写
	(2-2) 絵入り版本	版本にも、絵を伴うものが少なくありません。ここでは、墨で刷った上に筆を用いて彩色を施した本と、色版を用いて多色刷りをした本の例を展示します。	
	墨刷り彩色本	墨の版で絵の輪郭や黒地部分を刷った上から、筆などで色を付けた本です。江戸時代以降に見られます。	
	丹緑本	江戸初期の物語などの版本で、挿絵に丹・緑・黄の色を付けたもの。普通の彩色とは異なり、絵のところどころに色を塗る程度で、対象と色の関係もあまり考慮されていないが、独特の味わいがある。	
III-23	狭衣		江戸初期刊
	合羽刷り本	挿絵の上に、色を塗る部分をくりぬいた型紙を置き、筆や刷毛でその部分を塗って色を付けた本。色版を使わず、多色刷りのような効果を上げられる。江戸中期以降に見られる。	
III-24	明朝紫硯	彩色には合羽刷りだけでなく、木版刷りも併用する。	延享3年(1746)刊
	色刷り本	墨の版のほか、何色かの色版を用いて絵を色刷りにした本です。	
	多色刷り本	複数の色版を用いて絵を印刷した本。江戸中期から現れ、浮世絵系の絵師が関わり、多くの絵本が作られ、錦絵の発達とも交渉を持った。	
III-25	狂歌百千鳥		江戸末期刊

番号	名称	解説	年代
	ちりめん本	明治十八年(1885)から昭和初期にかけて英語など外国語で出版された、日本の昔話や伝説を題材にした小型の絵本。木版多色刷りの挿絵を持つ。紙に縮緬の皺のような加工が施されているので、ちりめん本と呼ばれる。	
III-26	SCHIPPEITARO(竹篋太郎)		明治21年(1888)刊
	(3) 稿本・清書本・校正刷り	写本のうち、著者自身が製作に関わったものは特定の名称で呼ばれる場合があります、ここではそれについて例をあげて解説します。	
	稿本	著作の完成途上にある下書き本です。何段階かに分かれる場合、それぞれ初稿本・再稿本・三稿本……と言います。	
III-27	古今要覧稿		江戸末期写
	清書本	稿本に基づいて清書した本です。定稿本と一致する場合も多いですが、中間段階でいったん清書した本もあります。また、著者の依頼で別人が清書することがあります。	
III-28	古今要覧稿		江戸末期写
	校正刷り	活字を組んだ版や彫った版木で試し刷りをしたものに、著者などが訂正の指示を加えた校正刷りが、稀に伝存しています。実際に出版された本とともに展示します。	
III-30	国史略		文政9年(1826)刊
	(4) 書物以外の資料	形態的に書物としては扱われませんが、書物に近接した所に位置する一群の資料があります。ここでは、それらの例を展示します。	
	古筆切	古写本の一部を、鑑賞などのために切り取ったものです。手鑑に貼ったり、掛軸に仕立てることもありますが、ここでは切ったままの形のもの展示します。	
III-31	六百番歌合 断簡		室町後期写
	短冊	和歌や連歌・俳諧の発句などを書くための、細長い紙です。鎌倉末期頃に現れ、現在でも広く使われています。	
III-32	葛岡宣慶短冊		江戸前期写
	掛軸	絵や字などを壁に掛けて鑑賞するために考案されたものです。古筆切や一枚物は、しばしば掛軸に仕立てられます。	
III-33	契沖書状		江戸前期写
	一枚物	書状・文書や小型の地図など、紙一枚程度の、比較的小さいものを言います。印刷されたものは一枚刷りと呼ばれます。	
III-34	法羅陀山善名称院地藏尊略縁起		文化7年(1810)刊
	畳み物	比較的大きく、最初から畳んで収納することを前提に作られたもので、大判の地図などがこれに当たります。しばしば、畳んだ時に表に出る部分に表紙が付けられています。	
III-35	江戸切絵図	いわゆる尾張屋版の、彩色刷りの江戸の区分地図。全三十二舗から成る。広げた時の右上隅と左下隅の裏に、それぞれ表紙と裏表紙が付く。	嘉永2年(1849)～慶応元年(1865)刊

番号	名称	解説	年代
	Ⅳ 性質の判別	このセクションでは、和書を資料として用いる際に注意すべき、版種や奥書の判別などについて解説します。	
	(1) 古活字本と整版本	江戸初期は、活字版から整版への移行期で、同じ著作が両方の形で出版されることもあり、古活字本を覆刻した整版本もしばしば刊行されました。ここでは、両者の判別の方法について解説します。	
	匡郭のあるもの	古活字本の匡郭は、上下左右の線を組み合わせて作るため、隅にしばしば隙間が生じます。匡郭のある版本では、匡郭の隅に隙間があるかどうかで、古活字本か整版本かを見当づけができます。	
Ⅳ-1	史記		江戸初期刊
	匡郭のないもの	古活字本の活字は齧によって高さが微妙に異なり、墨付きが一律でないことから、匡郭のない版本では、墨付きの様相が古活字本か整版本かの判別の拠り所の一つとされます。しかし古活字本と認定するのにより確実な方法は、欠損活字の使用を確かめることでしょう。	
Ⅳ-2	諸礼集		江戸初期刊
	古活字覆刻整版本	江戸初期には、古活字本を覆刻した整版本がしばしば作られました。一見すると元の古活字本と酷似していますが、連続文字のあり方などが整版本であることを示しています。	
Ⅳ-3	伊勢物語	「とり（鳥）のこ（子）をとを（十）つゝとを（十）はかさ（重）ぬとも」の「とをは」と「かさ」がそれぞれ連続し、かつ「か」の上端が「は」にくい込んでいるが、「とをはかさ」のような無意味な連続活字が作られる可能性は低い。本書が基づいた古活字版（嵯峨本）では、「とをは」と「かさ」は離れている。	江戸初期刊
	(2) 奥書と刊記の問題	和書において、写本の奥書と版本の刊記は、その本の素性・製作年代・製作環境などを知る上で重要なものです。しかし、奥書はその性質について判別が必要であり、また刊記は必ずしもあるとは限りません。ここでは、それらの問題について解説します。	
	本奥書と書写奥書	奥書のうち、書写に用いた本（底本・親本）にあったものを本奥書、その本の書写に当たって書かれたものを書写奥書と言います。	
	本奥書	既存の写本を転写して新しい写本が作られる際、底本（親本）の奥書を転記することが多い。和書では底本のことを「本」と言うので、底本にあった奥書の意味で本奥書と言う。本奥書は「本云」という注記を冠することが多くあり、また署名の下に「判（在判）」とあれば本奥書と認定できる。	
Ⅳ-4	春日権現験記		江戸中期写
	書写奥書	本奥書に対し、当該の写本が書写された際に書かれた奥書を、書写奥書と言う。本奥書は必ずしも「本云」と注記されないの、注記のない奥書は、本奥書か書写奥書かの判別が必要である。	
Ⅳ-5	溪嵐拾葉集 円寂記	奥書に、法曼院前大僧正慶算の命により書写して法曼蔵（比叡山法曼院の経蔵）に納めるとあるが、冊初に「法曼院」「慶算」の印記があり、表紙に「比睿南山／法曼院蔵」の墨書があることから、貞享3年の宗益の奥書は書写奥書と認められる。	貞享3年(1686)写
	奥書の真偽	奥書は写本の素性や書写の事情等に関して重要な情報を提供するものですが、時として権威づけなどのために、偽の奥書が創作されることがあります。	

番号	名称	解説	年代
	偽奥書	権威づけや年代の偽装などの目的から、架空の奥書が書かれることも少なくない。創作された奥書は、人物と年代の矛盾などから、捏造であることが判明する場合もある。	
IV-6	至花道	世阿弥の能楽伝書。永享2年の奥書は同系統の他の写本になく、世阿弥自身が「世阿弥」と署名した例はないこと、「服部世阿弥」は世阿弥を服部姓とする後代の俗説を踏まえたものと見なされることから、偽造の奥書と判断される。	江戸後期写
	真偽不明の奥書	捏造の疑いがあっても、容易に判定できない奥書もある。特に具体的な人物名のない奥書は判断が難しい。	
IV-7	伊勢物語朱雀院髓脳		江戸中期写
	書写奥書・刊記のない本	写本には書写奥書のないものも少なくなく、版本も江戸初期頃までは刊記のないことが珍しくありません。書写奥書や刊記のない本をどう位置付けるか、資料として扱う場合の課題になります。	
	書写奥書のない本	写本が作られる際は必ず書写奥書が書かれるわけではなく、書写奥書のない写本も少なくない。その場合は、年代を墨色・書風・料紙・装訂・表紙などから総合的に判断しなければならない。	
IV-8	曾我物語(本門寺本)	天文23年(1554)の日義の奥書があるが、料紙・墨色等から見て江戸末期の写本と考えられる(あるいは明治期にかかるか)。天文の奥書は本奥書で、この本の書写奥書は記されていない。	江戸末期写
	無刊記本	江戸中期以降の版本は、私家版などを除き通常刊記を持つが、特に江戸初期頃までは、刊記のない版本も珍しくない。その場合は、開版年代・出版の事情や環境などを、字様・料紙その他から推定する必要がある。	
IV-9	感山雲臥紀談	「貞和(丙戌)三月吉日沙門明超/捨財命工鏤梓流通/……」の刊記があるが、訓点を付刻することなどから見て貞和2年(1346)の刊本とは考えられず、江戸初期に五山版に訓点を付して覆刻した本と見なされる。貞和の刊記は基にした版本のもので、この本の刊記はない。	江戸初期刊